

No.3124

東南アジアにおけるリビングヘリテージとカルチュラル・ランドスケープの保存、活用、創成に関する国際会議

早稲田大学文学学術院、名誉教授

西村 正雄

2023年3月11日と12日に、ラオス人民民主共和国チャンパサック県チャンパサック郡において、シンポジウム形式の国際会議を開催した。本国際会議の題目は、『東南アジアにおけるカルチュラル・ランドスケープ・アプローチに関する国際会議』であった。

基調講演者として、東南アジア考古学、及び生態人類学の分野で世界的に著名なカール・L.ハッター博士(カリフォルニア大学サンタバーバラ校名誉教授)を招き、また、日本、タイ、カンボジアからの専門家、さらにラオスの研究者と世界遺産保存事務所の若手のメンバーを招いた。また会議の目的である現地の人々との意見の交換から、特にチャンパサック世界遺産保存事務所のメンバー全員と、遺産が存在する場所の村人たちを招いた。

会議の目的は、1) 専門家が考える遺産の概念・保存方法と、遺産と共に暮らす人々の遺産の概念と保存の間の考え方の違いを明らかにし、2) 地元の人々の考え方や、遺産の保存の方法について具体例を明らかにすることであった。遺産が自然環境の中で存在することから、村人の自然観、宗教観などを含め討議することであった。こうした自然と遺産を含む包括的な概念として「カルチュラル・ランドスケープ」という用語を用いた。

会議では、地元ラオスの専門家、地元民の発表に、日本、タイ、カンボジアの学者の発表とコメントなど熱心な議論がなされた。その中で明らかになったのは、1) 外部専門家と地元の人々の間の考え方の差が大きいこと；2) 地元の人々は単純に外部の専門家の遺産の保全の考えに従っているわけではないこと、むしろ自分たちと外部という住み分けを行っていること；3) 地元の人々の遺産の概念はより広範であり、それを最もよく表すものは無形遺産であることであった。会議の総括として、遺産の保護に関して、地元の人々の意見や、考えを尊重して進めるために、無形遺産の調査、保全を優先させて行うことが重要であるとの意見をまとめた。